

内容： フロントランナー 東大数物連携宇宙研究機構長 村山斉さん 「半分が外国人。ビジョンに共鳴して来てくれた」

媒体名： 朝日新聞

年月日： 2011年5月21日(土) be on Saturday 1面・3面

フロントランナー

(b1面から続く)

「半分が外国人。ビジョンに共鳴して来てくれた」

村山 斉さん

東大数物連携宇宙研究機構長

——日本から誘われたとき、迷いはありませんでしたか？

世界的な研究拠点作りに協力してほしいといわれ、宇宙についての人類共通の大疑問をさまざまな分野の第一線の研究者を世界中から集めて解く、という機構長ビジョンを書きました。でも文部科学省の選考ではまず通らないと思っ

ていました。①日本の仕事の経験がない②若すぎる③役に立たない基礎研究、だからです。決まったと聞き、困った、と。

しかし、カリフォルニア大が国際的な研究所作りの意義を理解して休職を認めてくれました。

始まると、優れた研究者が集まっていることなどが評価され、機構長の統括を求める声が強くなりました。また、はたと困りました。名譽ある大事な仕事ですが、休職は2年まで。時間をやりくりして

1年の半分は米国で教育の義務を果たすことで継続が認められました。ただ、家族には不評で、米国にいるときはできるだけ家族とすごすようにしています。

暗黒物質に迫る

——宇宙に関心を持ったのは？

このころ、星が好きでした。望遠鏡を買ってもらえなくて天文学者になり損ねました。博士号をとった1990年代初め、量子力学に支配される初期の宇宙のミクロの世界が、現在の宇宙のマクロの世界とつながっていることがわかってきました。びっくりすると同時に、これは面白い。以来、宇宙との関わりの中で、反物質や超対称性などの研究を実験と理論の両面で進めてきました。

——そしてどんでん返しが。

10年ほどして、原子など私たちが知っている物質だけでは今のよくな宇宙はできないことがわかり、がくせんとなりました。約2割が「暗黒物質」、75%が「暗黒エネルギー」、名前はあっても、その正体は全くわかっていません。その正体探しは世界的な競争です。私たちの強みは、岐阜県神岡鉱山の地下にある東大宇宙線研究所の施設を利用した実験装置、国立天文台のすばる望遠鏡に組み込ませてもらう高性能カメラです。理論家も力を合わせ、まずは暗黒物質に迫りたい。

——機構長としての仕事は？

①サンドイッチマン②人買い③金せびり、といつもいっています。

最初は人集め。知り合いに片っ端からメールを送って転送を頼みました。ある若手には同じメールが7通も届いてさすがにうるさいと。600人の応募から20人採用しました。半分が外国人で、まだ何も無いプレハブの研究所に僕のビジョンに共鳴して来てくれた。すぐくうれしかったです。

外国人が日本に来るのをためらうのは、キャリアパスにならないと思われているからです。そこで1カ月は日本にいるという規則を作りました。本国に帰れたら安心できるし、IPMUの宣伝にもなる。ようやく日本の仕事に次につながる循環が始まってきたと思います。

日本で生活を始めるための支援にも力を入れました。僕も日本に生活の基盤がなかったため、外国から来る人の苦労がよくわかりました。支援サイトを僕が作り、スタッフが拡充してくれて、東大総長の業務改善賞を受けました。

——そもそも、科学への関心が芽生えたのはいつですか？

小学生のころは、ぜんそくがひどくて学校を休みがちで、家で中学生向けの教育テレビをよく見ていました。今でもよく覚えています。

のはうなぎやの話。においをかぎに来る人から代金をとれるか。うなぎから出た小さい物質が鼻まで飛んできたのがおいたという。犬のふんを見るたび、小さな粒が僕の鼻に飛んでくるのかと、気持ち悪くなって困りましたが、科学や数学の面白さを知りました。

見える研究所に

——大学は物理学科ですね。

物理ってこんなに面白かったのかと目覚めたのは、大学院入試のために勉強したときです。でも、入ってみると、素粒子論をやっていたのに、周囲は当時流行のひも理論ばかり。修士課程を終えたらやめようと思ってきました。

幸い、外部の素粒子の先生を紹介され、全国から仲間を募って集中講義をお願いしました。先生の帰国を2年待ち、博士課程の最後の1年で突貫工事で勉強し、電車の中で綴じ込んでぎりぎりで論文を提出しました。実験に関する論文でしたが、こんなのは理論ではないと、ほとんど落とされるところでした。日本にいても仕方がない、米国へ行こうと思いました。

——米国はどうでした？

研究者はそれぞれポリシーがあってやっている。それがすごく楽しかった。しかも面白いと思っただけで、どんどん分野を変えていく。自分で自分に枠をはめない、そんな研究スタイルが魅力です。

——これからの機構の課題は？

世界から見える研究所にしたい。継続性がないと良い人から出ていってしまう。文科省のプログラム終了後もIPMUを続ける必要があることをわかってもらう活動や資金集めに奔走しています。



★1964年生まれ。東京都出身。きょうだいは妹が1人。写真は6歳のころ家族と。国際基督教大高校時代の恩師、滝川洋二さんは「とにかく好奇心の塊で、何でも首を突っ込んでみる姿が印象に残っている」。

★82年、東京大学入学、「コントラバスに熱中してほとんど授業には出なかった」。86年、同大理学部卒業、91年、同大学院博士課程修了、東北大助手。

★93年、米ローレンス・バークリー国立研究所員、95年、カリフォルニア大バークリー校助教、2000年教授。

★02年、西宮湯川記念賞受賞。

★07年、文部科学省の世界トップレベル研究拠点プログラムで約7倍の競争を勝ち抜いたIPMUの初代機構長に。専任研究者は現在約70人。東大理学部からIPMUに移った野本憲一教授は「機構長の知名度もあり、世界最先端の研究者が多く訪れる。活発な議論ができるのが魅力」。

★日本でピアノ教師をしていた妻は渡米後、米国の音楽大学の修士課程を終え、プロの教会オルガニストに。19歳の長男、17歳の長女、14歳の次女も米国に暮らす。

◆次回は、若い世代が夢をもてる農業の姿を探る「農家のこせがれネットワーク」代表、宮治勇輔さんの予定です。

プロフィール



ティータイムに博士研究員(右)らと談笑。公用語は英語だ—千葉県柏市の東大柏キャンパス